

吾輩は猫である。名前はまだない。

どこで生まれたか、とんと見当がつかぬ。なんでも、薄暗いじめじめしたところで「ヤーニヤー泣いていたことだけは記憶している。吾輩はここではじめて人間というものを見た。しかもあとで聞くと、それは書生という、人間中でいちばん獐悪な種族であったそうだ。この書生というのは、ときどきわれわれをつかまえて煮て食うという話である。しかしその当時はなんとという考えもなかったから、べつだん恐ろしいとも思わなかった。ただ彼ののひらにのせられてスーと持ちあげられたとき、なんだかフワフワ、た感じがあつたばかりである。

てのひらの上ですこし落ちついて書生の顔を見たのが、いわゆる人間というものの見始めであろう。このとき妙なものだと思つた感じが今でも残っている。だいいち毛をもつて裝飾されべきはずの顔がつるつるして、まるで薬罐だ。その後猫にもだいが逢つたが、こんなかたわには一度も出くわしたことがない。のみならず顔のまん中があまりに突起している。そつして、その穴の中からときどきぶつぶつと煙を吹く。どつも咽せほくて、実に弱つた。これが人間ののむ烟草というものであることは、ようやくこのころ知つた。

この書生ののひらのうちで、しばらくはよい心持ちにすわつておつたが、しばらくすると非常な速度で運転しはじめた。書生が動くのか自分だけが動くのかわからないが、むやみに眼がまわる。胸が悪くなる。とうてい助からなと思つていると、どさりと音がして眼から火が出た。それまでは記憶しているが、あとはなんのことやら、いくら考えだそうとしてもわからない。

ふと気がついてみると書生はいない。たくさんおつた兄弟が一ぴきも見えぬ。肝心の母親さえ姿をかくしてしまつた。そのうえ、いままでのところとはちがつて、むやみに明るい。眼をあいていられぬくらいだ。はてな、なんでもようすがおかしいと、そのそはいだしてみると非常に痛い。吾輩は藁の上から急に笹原の中へすてられたのである。

ようやくの思いで笹原をはいだすと、向こうに大きな池がある。吾輩は池の前にすわつて、どうしたらよかるうと考へてみた。べつに、これという分別も出ない。しばらくして、泣いたら書生がまた迎いにきてくれるかと考へついた。ニヤー、ニヤーと、こころみにやつてみたが、だれもこない。そのうち池の上をさびさらと風が渡つて日が暮れかかる。腹が非常にへつてきた。泣きたくても声が出ない。しかたがない、なんでもよいから食い物のあるところまであるこうと決心をして、そろりそろりと池を左にまわりはじめた。どうも非常に苦しい。そこをがまんして無理やりにはつてゆくと、ようやくのことで、なんとなく人間臭いところへ出た。ここへはいつたら、どつにかなると思つて竹垣のくすれた穴から、とある邸内にもぐりこんだ。